

会 議 記 録				
会 議 の 名 称	環 境 厚 生 常 任 委 員 会		会 議 場 所 第3委員会室	
			担 当 職 員 山 末	
日 時	平成30年3月1日(木曜日)		開 議	午後 1 時 30 分
			閉 議	午後 4 時 21 分
出席委員	◎平本 ○富谷 酒井 小川 齊藤 菱田 小島 馬場			
理事者 出席者	【市立病院】玉井病院事業管理者、佐々木管理部長 〔病院総務課〕松村課長、西田管理係長 〔経営企画室〕竹内室長 【環境市民部】塩尻部長 〔環境クリーン推進課〕大西副課長 【健康福祉部】栗林部長、辻村子育て支援担当部長 〔高齢福祉課〕広瀬課長、岩佐介護保険係長 〔こども未来課〕森岡課長、宮川非常勤嘱託			
事務局	片岡事務局長、鈴木議事調査係長、山末主事			
傍聴者	市民 0名	報道関係者 0名	議員0名	

会 議 の 概 要

1 開 議

2 事務局日程説明

3 行政報告

[理事者入室] 市立病院

(1) 平成29年度病院事業会計の状況について

<病院事業管理者>

(概要説明)

<管理部長>

(資料に基づき説明)

[質疑なし]

[理事者退室]

～ 13 : 46

[理事者入室] 環境市民部

(1) 亀岡市ゼロエミッション計画について

<環境市民部長>

(概要説明)

<環境クリーン推進課副課長>

(資料に基づき説明)

～ 14 : 01

[質疑]

<馬場委員>

平成25年に策定した計画を見直したということだが、その計画の総括は。

<環境クリーン推進課副課長>

人口の減少もあり、ごみの総量は減少しているが、資源化があまり進んでいない状況である。プラスチック容器包装のリサイクル等を進め、ごみのかさはかなり減り、埋め立て処分場の延命化が図れているが、重量比ではあまり減っていない。最近では、電子書籍の普及等により新聞等が減るなどして、ごみの総量が減っているにもかかわらず資源化率が上がっていない。

<馬場委員>

排出者責任について、状況は改善されているのか。

<環境クリーン推進課副課長>

市民については広報等を通じてリサイクルが進んでいる。しかし、民間事業者について、大きな事業者はISOの関係等や会社のイメージもあるため、リサイクルが進んでごみが減量されている部分があるが、小規模の事業者は、そこまで手が回らず、廃棄物の収集運搬に任せきりになり、ごみの減量やリサイクルが進んでいない状況である。KESというごみを減らす中で企業利益を増やしていくというISOのような形の組織もあるので、そういったものも活用しながら取り組むべきと考えている。

<平本委員長>

啓発はどのようにしていくのか。

<環境クリーン推進課副課長>

ごみの減量が進んでいる中で、啓発はなかなか難しく、企業側の努力なしではできないところもある。ごみの組成調査をしたところ、資源化に回せるものもかなりあるので、これまで以上に積極的に広報活動をしていきたい。最近では、保育所や小学校等でごみの減量の授業を積極的に行っている。子どもがそういうことを学ぶと、親も同じような形でリサイクルしなければならないということで、こちらが想定している以上の波及効果がある。料金体系についても考えていく必要があると考えている。

[理事者退室]

～ 14 : 17

[理事者入室] 健康福祉部

(1) 亀岡市いきいき長寿プラン（亀岡市高齢者福祉計画・第7期亀岡市介護保険事業計画）について

<健康福祉部長>

(概要説明)

<高齢福祉課長>

(資料に基づき説明)

<健康福祉部長>

(資料に基づき説明)

[質疑なし]

[理事者退室]

～ 14 : 27

4 今後の取り組みについて

<平本委員長>

提出いただいた提案書について、酒井委員から説明を。

<酒井委員>

期限を決定してから動いていくのがよいと思う。プロセス等も簡単に書いたが、協議の中で具体化していくのがよいと思う。始めの部分はこれまでの活動で済んでいるので、残りの部分について、専門的知見を活用して進めていくのはどうかと思う。以前、議員団研修に来ていただいた牧瀬稔先生に問い合わせたところ、協力いただけるとのことであった。また、前回の委員会で、先生の考え方によって条例が左右されるのではないかという意見があったが、条例を制定するのはあくまで委員会であるため、技術的な部分についてのアドバイスになる、ということだった。このような流れであれば本日中に先生に協力いただくことを決定し、今後の活動について協議していけばよいと思う。

<平本委員長>

説明のとおり12月を期限とすることとしてよいか。

<了>

<平本委員長>

それでは、12月を目標として取り組むこととする。また、専門的知見について、牧瀬先生の名前が出ているが、それに異議はあるか。

<酒井委員>

議会・委員会・議員個人の政策条例のサポートを行っている先生の中で、コンタクトが取れたのが牧瀬先生だった。他に皆からの提案があれば、その中から選択すればよいと思う。

<平本委員長>

特に提案がなければ牧瀬先生に依頼することとしてよいか。

<了>

<平本委員長>

条例制定に向けて、先生にサポートを依頼することを議会運営委員会に報告しておいた方がよいのか。

<議事調査係長>

委員会の審査や調査は基本的には独立しているが、円滑に運営いただくという点では、報告することもよいと考える。

<平本委員長>

12月を期限とし、牧瀬先生にサポートを依頼することを委員会の総意としてまとめる。また、子どもの権利条例の制定に向けて取り組むことと牧瀬先生からサポートをいただく旨を各会派で説明願いたい。

<齊藤委員>

会派で説明するに当たり、牧瀬先生のプロフィールを準備いただきたい。

<平本委員長>

事務局で準備願いたい。

<議事調査係長>

事務局で準備する。

<平本委員長>

今後の詳細については、正副委員長と説明いただいた酒井委員と事務局で調整していく。

<休憩 14:42～14:50>

5 行政報告

[理事者入室] 健康福祉部

(1) 子どもの貧困について

<健康福祉部子育て支援担当部長>

(あいさつ)

<こども未来課長>

(説明者の経歴について説明)

<こども未来課非常勤嘱託>

(資料に基づき説明)

～15:39

[質疑]

<齊藤委員>

沖縄県では仕事が少ないと聞く。高校の修学旅行は全員が行くわけではなく、お金に余裕のある家庭だけが行くという状況である。しかし、地域の人はずっとそれで暮らしてきたので放っておいてくれということではなかったのか。

<こども未来課非常勤嘱託>

放っておいてくれということではなかったが、何が問題なのか、ということではあった。しかし、それはある層より上の人である。相談を受け付けても来てはもらえないのだが、いろいろな方法で相談に乗ると、「こんな風に相談ができてよかった」「今までどうすればよいかわからなかった」「本当につらかった」という声がかなりあったので、ニーズはあった。

<齊藤委員>

内閣府からの予算がつかなかった場合、沖縄県はどうしていたのか。

<こども未来課非常勤嘱託>

最終的には県で予算をつけたが、最初は乗り気ではなかった。

<齊藤委員>

東京に行くことが全てではないという取り組みを小さな頃からやっていくと地方も活性化していくのではないかと。納税者を育てる教育をしていくことが根本ではないかと考えるがどうか。

<こども未来課非常勤嘱託>

そのとおりだと思う。今帰仁村でもよく言っていた。沖縄県では優秀な子どもが県から出ていく頭脳流出が起こっている。できれば県外へ、それができなければ北部から南部へ、という意識がある。そうではなく、今帰仁村を担っていく人材を育てた方がよいのではないかと。このことを教育長によく言っていた。今帰仁村では子どもを集めて東京大学を見せに行く。それでは今帰仁村から出て行ってほしいのか今帰仁村を育てて行ってほしいのかわからない。その辺りが混乱している部分があると思う。

<菱田委員>

亀岡に住んでいる人は、山しかない、田んぼしかない、京都まで遠い、という「ない」という感覚を持っており、「ある」という感覚が大事だと思う。霧が出て困るということではなく、霧を何かに使えないかということをして市長が取り組んでいるが、そういう発想を子どもたちに植え付け、社会体験をさせることにより、亀岡に住みたいという子どもたちを育てることが大事ではないかと考えるがどうか。

<こども未来課非常勤嘱託>

困窮した子どもたちは社会経験が特に不足している。これは、貧困の中でも経済的貧困だけではなく経験の不足ということがある。2020年に向けてのプロジェクトがあると聞いているが、そういった時に、子どもたちに体験させるだけでなく、参画させてほしい。自分が働きかけ、意見を言ったことが形になるという成功体験の機会を行政がつくってほしい。成功体験が、大人になっても亀岡で子どもを育てたいという気持ちや誇りを持ち、自己有用感が上がることに繋がると思う。

<酒井委員>

当委員会では子どもの貧困をテーマとして活動してきたが、足立区で視察をした時に、子どもの貧困は、やがて対策をなくしていくことが目標であり、大きな事業をする必要はないが、職員が横断的意識を持っていればよいという話を聞き、今の話と重なる部分があった。当委員会からの提言として、全庁横断的な連携という項目を書いたが、少しの努力でできる連携がなかなか実現できないのかという疑問があった。今帰仁村でそのようなことはなかったのか。

<こども未来課非常勤嘱託>

今帰仁村の場合は何も意識がないというところから始まった。「貧困などないだろう」というところから始まっている。まずは、これが貧困であるということの一つ一つ認識してもらう作業が必要だと感じた。亀岡市の職員はスキルもモチベーションも高いと思うが、福祉部局は常にそういう人々を見ているので、そういう人がいて当たり前という感覚になっていく。そのため、そこに相対化するプロセスをつくり、こういう課題があるが、他の部局で何か手を貸してくれないか、というような横断的な話をする場が少しあるとよいと思う。交通の話やふるさと創生の話など、福祉ではないからこそできることがあるということをお話し合える場があればよい。今帰仁村でも、それを始めてから急に他の部局から呼ばれることが増えた。

<酒井委員>

相手に意識がなければ連携がなかなかうまくいかないということか。

<こども未来課非常勤嘱託>

そうだと思う。内発的動機の有無で、発見やアイデア、相乗効果の生まれ方が違う。

意識付けのプロセスがあると皆がわくわくしながら取り組める。

<酒井委員>

子どもの貧困だけでなく、子どもの権利の視点から大学で指導されていたと思うが、それについても話を伺いたい。

<こども未来課非常勤嘱託>

私は、全ての人が希望の人生を送れるようになることを保障したいと思っている。私は教育分野の授業を担当していたが、なぜ教育かというと、教育は人生を切り開いていく力をつけていく、自分が自分の人生の主人公になっていくということに本当の教育の理念があるということを知った時に、教育に希望を見出したからである。子どもの権利の保守、子どもが育っていくこと、希望の人生を叶えていくこと、この一心でやっている。大学でも、そのためのプロセスの1つが教育であり、皆の前に来てくれる子どもたちはそういう子どもたちなのだという話をしている。

<酒井委員>

現在の子育て家庭への支援では、子どもから直接声を聞くことができていないのではないと思う。以前も家庭相談支援員から説明いただいたことがあったのだが、その時も子どもからの直接の声を聞くことがあまりできていないということだった。子どもの権利を自覚することにより、生きる力・未来をつかみ取る力を育ててほしいと思う。他の自治体の先進的な事例を知っているか。

<こども未来課非常勤嘱託>

沖縄市では、子どもの権利条約に則した自治体にしようということで、議会であと少しのところまでいったが否決されてしまった。川崎市では、多文化の人も多く、そういう取り組みに積極的であり、子どもの権利についても取り組んでいる。子どもが意見を表明していくこと、自分で切り開いていくということ、これは教育と連携すると相乗効果が発揮されると思っており、教育委員会と連携ができればよいと思う。例えば、亀岡市での虐待は身体的な暴力が結構多い。そのように育てられたからそういうものだと思っていた、という人が少なくない。これを課の中で報告したところ、母子保健の方で妊娠中や出産直後から「これは虐待である」ということを広く知らせていこうということになり、話してよかったと思った。学校の先生や親が変わっていくことが大事であり、そこに予防として啓発というプロセスを入れていくことがとても大事だと考える。福祉と教育の温度差を感じるのも、それがポイントの1つではないかと考えている。

<馬場委員>

足立区では、親が仕事に関係ないからという理由で子どもを学校に行かせないということがあった。沖縄でもそういうことがあるのか。

<こども未来課非常勤嘱託>

一定数あった。亀岡市でも聞いているので、どこにでも一定数はあるのではという気がしている。先ほどの話は逆になるが、沖縄県の場合は、親が公務員や看護師にさせたいという思いが圧倒的にあり、そういったところがモチベーションになっていることもある。親の意識はある程度関係していると思う。

<馬場委員>

本市において介護疲れの関係の事件があったが、そういうことを起こさないような環境はどのようにつくっていくことがよいと考えるか。

<健康福祉部子育て支援担当部長>

今まできちんとできていることができなくなるということから起こったものだと思う。今後もそういうことが起こる可能性もあるのではないかと危惧している。

<こども未来課非常勤嘱託>

徳島県海部町は、自殺率が非常に低い自治体である。なぜ自殺率が低いのかという研究をされた人の書籍を読んでみると、昔の言い方で「病は市に出せ」という言い方があるそうである。「自分がつらいことは外に出してしまいなさい」ということであり、「できないことはできないと早く言いなさい」と学校で言われたということがあった。資料に、ゆるいつながりがある地域は自己肯定感が高いということを書いたが、ここは海部町を意識して書いている。海部町の人たちは、うつや精神疾患の受診率が低いわけではない。少しまずいと思ったらすぐ受診・相談に行くという体質である。自分が無理だと思ったら助けを求めるところができるということである。今帰仁村の場合は絶対に隠さなければならないという意識が働いてしまったり、民生委員ですら遠巻きに見てしまうところがある。それにより、支援まで長がかかり悪化していくということがあった。ヘルプが上手に出せるようになることが学校教育の中でもとても大事だと思っている。できないことが悪いとか、できる子が偉いという評価のまなざしで子どもを育てると、できないことが悪いという意識になる。価値観を植え付けるのは教師だということを私の教員養成の中でもよく言っていた。

<小島委員>

本市の横断的な連携をどのように感じているのか。

<こども未来課非常勤嘱託>

相談員の業務が忙しく、俯瞰する立場にないので見えていない部分が多いと思うが、もう少し上手く役割分担ができれば市民に迅速に支援が継続できるのではないかなと思うことがある。職員の意識が低いということではなく、忙しすぎて連携する余力がないと感じる。また、他の部署と連携する機会がない。

<小島委員>

全庁を挙げての取り組みを一緒に行っていきたい。

<平本委員長>

ちょっとした意識改革で全庁的に取り組めるのではないかなと思うが、まず何が必要と考えるか。

<こども未来課非常勤嘱託>

沖縄県ではビジョンを立てた。次に数値目標をかなり具体的に立てた。これも1つなのかなと思う。「子どもの貧困対策が適切に講じられた結果、6年後の平成34年3月には、児童虐待やいじめで苦しむ子どもが減っています。家庭で朝食を欠食したり、ひとりで食事をする子どもが減っています。」など、非常に具体的に簡単な言葉で、子どもが見てもわかるような、わかりやすい表現をしている。これは、市民全体で取り組む時にはかなり有用である。また、既に職員が気付いていることがたくさんあると思う。それをまず出してもらって作業や、ワークショップで「どんな亀岡にしていきたいか」ということを皆で共有し、課題ではなく、ポジティブな言葉に変換し、「こうだったらよい、このためには自分の部局で何ができる」ということを、どれだけ些細なことでもよいので楽しく共有する場をつくるのがよいと思う。

<平本委員長>

全庁で取り組む機会をサポートしたいと思う。相談員としての業務がかなりハードであるということもあるが、業務のバランスはどうか。

<こども未来課非常勤嘱託>

かなり厳しい。

<平本委員長>

宮川さんには客観的な視点でアドバイスをいただきたいという点と、スキルを人材育成に回していただきたいと思う。しかし、本人の業務に支障が出てはいけないというところで、部長も人材確保に努めていただいている。限られた人材なので、無理のない範囲でお願いしたい。

<こども未来課非常勤嘱託>

亀岡市はポテンシャルの高いところだと思う。しかし、毎日の業務が本当にハードである。今後も何らかの形でかかわることができればと思う。こども未来課は本当にすばらしい課であり、議員の皆さんも理解が深く、理想的な形だと思う。

[理事者退室]

～ 16 : 19

6 その他

<馬場委員>

新火葬場整備促進協議会の資料を各委員で共有してはどうかと思う。

<平本委員長>

資料を請求する。次回の委員会は3月9日（金）に開催する。

散会 ～ 16 : 21